今を生きるための古典

岩崎 務

古典を読もうなどといっても、せわしく状況が変化し、一瞬を逃さず効率的な対応をすることが何より重要なこの情報化社会では、何をのんきなと言われてしまうかもしれません。それでも、私の学生時代の先輩にあたる人がある文章の中でこんなことをおっしゃっています。学問にはたとえると駅伝型とマラソン型の二種類がある。社会のために直ちに役立つことが求められる学問においては、後の人は先の人の到達点から進み始めるのに対して、人間性に関わる学問においては、すべての人が同じ出発点から歩き始めなければならない、と。

この後者のマラソン型と言われている学びにおいて、まさに出発点になっているのが古典と呼ばれる書物なのだろうと思います。ですから、古典は必ずしも古い時代に書かれたものとは限りませんが、私たちが生きている今からは何か遠いところにあります。そして、古典を読むことは、駅伝型の学びのように、今ある問題に対して短期で目に見える効果をもたらすわけではありません。しかし、人間というものに目を凝らしてみるとき、あるいは、自己の人間性を豊かにしようとするとき、なんだか遠回りでめんどくさいことに思われるでしょうが、まずは古典に立ち戻ってそこから始めることが必要なのです。

西洋古典を学んでいる身からすると、たとえばホメロスの『イリアス』などがそのような立ち戻るべき場所にあります。不死なる神々に弄ばれるようにして、運命に従い、また運命に抗って、戦いを遂行する死すべき身の英雄たち、そして英雄に倒される無名の多くの若者たちと、ほの見える彼らの背後にある家族と日常の暮らし。ここには、人間のありさまの原型というか、原風景みたいなものが見てとれます。このような古典に触れると、何となくフワフワと生きている、あるいは目先のことに追われて生きている自分の今が、実は永々たる人間の営みとつながっているという感覚をもち、大げさに言えば私たちの足の下にある重層的な歴史のようなものを感じることができます。

この外語大では、西洋古典の居場所がはっきりしないなあという感じがあったのですが、何年か前に大学院が改組されたときに「超域」というところに位置することになりました。笑われるかもしれませんが、そのときに今更ながら古典というのは超域なんだと納得しました。古典は、国も、地域も、民族も、時代も、言語さえも超えて存在するものです。ですから、さまざまなものに縛られて生きている私たちにとって、古典は大きな物差しとなって、その束縛と固定観念から解放して、私たちの今を相対化し立体化するパースペクティヴを与えてくれます。

それにしても、古典は読みにくいし、分かりにくいという声はしばしば耳にします。確かに、原語で読まないにしても、古典を読み通すには相当の忍耐と時間が必要になります。しかし、その読みにくさ自体も古典の利点ではないでしょうか。お手軽に読んで分かることのできるものではない書物を読んでみること、何の役に立つとも分からぬものを読んで何かをつかみとってこようと格闘すること、そして今の自分に響き合うものを見出す醍醐味、こうした読書経験をもつことは、情報というものを広く簡単に手に入れることができるようになった現代社会において、自分というものを保っておくためにはますます大事なことだと思います。

今回の『ピエリア』では数多くの選りすぐった古典が紹介されることでしょう。古典はひっそりとではありますが、不動の姿勢でみなさんの読みを待っています。

いわさき・つとむ　総合国際学研究院教授　古代ギリシア・ローマ文学

外大生にすすめる古典

桜舞う春風のなか、颯爽と大学の門をくぐった新入生の皆さん、久遠の理想を目指し、自分の道をひた走る在学生の皆さんへ――。「読まれるべき良書」としての「古典」を、本学の先生方にご紹介いただきました。この特集が豊潤な知の世界との邂逅となることを願いつつ、皆さんにお届けします。

＊所属は二〇一四年四月一日現在のもの。掲載は氏名の五十音順。（編集部）

荒川洋平（あらかわ　ようへい）

留学生日本語教育センター教授　認知言語学

①ハワード・ガードナー『認知革命――知の科学の誕生と展開』佐伯胖／海保博之監訳、産業図書、一九八七年

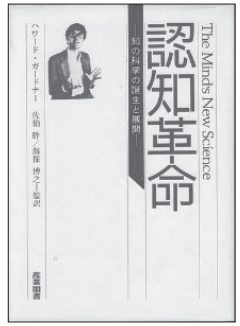
②ジャック・モノー『偶然と必然――現代生物学の思想的問いかけ』渡辺格／村上光彦訳、みすず書房、一九七二年

③梅棹忠夫『知的生産の技術』岩波新書、一九六九年

わたしの専門および関連分野で古典と目されているもののうち、手に入れることも読むことも難しくない三冊を選びました。

認知科学とは「心とは何か」を解明するために、一九五〇年代後半に生じた学際的なムーブメントです。ここで紹介する①**『認知革命』**はその代表的な結実であり、文・理を越えた、新たな教養のかたちが示されています。

この分野の隆盛は、言語の起源と進化というテーマに再び光を当てましたが、ここで有用なのは、進化生物学の知見です。②**『偶然と必然』**は、「利己的な遺伝子観」で有名なR・ドーキンズなど、最先端の研究者によって推薦される古典であり、生命倫理の問題などが、理系の知識なしには語れないことを教えてくれます。



最後に、学術におけるアウトプットの重要性を説いた一冊として③**『知的生産の技術』**を挙げます。パワーポイントもなかった時代の考察ですが、実践的な有用性を含め、今後ともこの本の価値が減じることはないでしょう。

上田広美（うえだ　ひろみ）

総合国際学研究院准教授　カンボジア語学

ヴァールミーキ『新訳ラーマーヤナ』全七巻　中村了昭訳、平凡社東洋文庫、二〇一二－二〇一三年

『ジャータカ物語――インドの古いおはなし』辻直四郎／渡辺照宏訳、岩波少年文庫、二〇〇六年

『今昔物語集　天竺・震旦部』池上洵一編、岩波文庫、二〇〇一年

ラーマーヤナとジャータカは、東南アジアを知る上でもお勧めの古典です。この二作品は、物語として読まれたり、語られたりするだけではありません。例えば、カンボジア版ラーマーヤナの『リアムケー』は、世界遺産アンコール遺跡に美しい浮彫があり、舞踊や芝居など古典芸能の題材としても演じられています。ジャータカ最終話『布施太子物語』も寺院壁画に描かれる題材です。観光で訪れる際にも、事前に物語を知っていると、さらに旅の楽しみが広がるでしょう。

今回は、本学附属図書館の蔵書から、読みやすい文庫版の日本語訳を選びました。別に、『ジャータカ全集』（中村元監修・補注、春秋社、二〇〇八年）も全巻、附属図書館にあります。月にいるウサギの物語がどう伝わったのか、ジャータカと今昔物語で読み比べてみてください。

今年（二〇一四年）度春学期には、大型影絵芝居や仮面劇のリアムケーを学ぶ講義（月・四、福富友子先生）があります。地域言語A（金・二）では、『リアムケー』の原書も講読します。

狩野キャロライン（KANO, Caroline Elizabeth）

元・世界言語社会教育センター特任教授／現・非常勤講師　英語教育

今回のテーマは「古典」ですが、これを「歴史」として解釈し、外大生の皆さんにぜひ薦めたい、それぞれ違う時代の歴史に基づく三冊を選びました。どれも英語で書かれており、事実とフィクションがブレンドされた作品で、日本文化や歴史を研究した西洋人作家による日本に関わる物語です。

時代の古い順に、一冊目は、**Liza Dalby** 著 ***The Tale of Murasaki***, 2001, Vintage U.K. で、二冊目は、**Alan Spence** 著 ***The Pure Land***, 2004, Canongate Books U.K. であり、そして三

冊目は、**Julie Otsuka** 著 ***The Buddha in the Attic***, 2012, Fig Tree (Penguin Books) U.K. です。

The Tale of Murasaki では、『源氏物語』の著者である紫式部の日記をもとにして、また、紫式部の和歌の英訳も交えて、紫式部の目を通して、一一世紀の平安時代の宮廷文化の様々な面や、宮廷の女性の芸術的な面では豊かでありながら、それぞれの地位によって決められた人生や、切ない恋愛が繊細に描写されています。

The Pure Land では、舞台は幕末から明治維新にかけての時代に変わり、長崎で活躍し、波乱万丈の生涯を送りながら日本の近代化に貢献したスコットランド人 Thomas Glover の人生や、その時代の劇的で痛ましい出来事が鮮烈に描かれています。

そして、***The Buddha in the Attic*** では、時代がさらに下り、二つの世界大戦の間、お見合い結婚によって、未知の国アメリカに渡って行く日本人女性の不穏な環境に委ねられた人生や辛くても頑張る姿が、珍しい一人称複数形で物語る方法と、流れていく叙情的なイメージによって強く伝わってきます。ぜひ英語能力を活かし、英語作品を通して、日本人の歴史的背景や先人の様々な人生について思いを馳せ、新しい発見をしていただければ嬉しく思います。

川島郁夫（かわしま　いくお）

総合国際学研究院教授　中国近世文学

劉義慶撰『世説新語』井波律子訳、平凡社東洋文庫、二〇一三－二〇一四年

六朝宋の王族劉義慶が、同時代に生きた有名人の逸話を集めて編纂した小説集。人物の性格を「徳行」「文学」など優れた点から「簡傲（高慢）」「倹嗇（ケチ）」に至るまで、計三六の項目に分け、各々際立った特徴を示す話を集めている。現代人の目には奇異に映る行動が、人間の本性をえぐり出していて興味の尽きない一篇である。

『唐宋伝奇集』（上・下）今村与志雄訳、岩波文庫、一九八八年

唐代伝奇は、中国初の、事実の記録以上の「物語」を伝えることを意図したフィクション文学と言え、恋愛・人生観など、すこぶる「人間臭い」題材が多い。「邯鄲夢」「長恨歌」「杜士春」「魚服記」など日本文学にも影響を与えた作品が多く、日本文化研究のためにも一読の価値あり。

朱熹編『宋名臣言行録』丹羽隼兵著、ＰＨＰ文庫、一九九五年

宋の大儒朱熹が編纂した、北宋の著名な官僚たちの名言集。朱子学における模範的人物が肩を並べ、江戸期の学問所では教科書の一つになった。范仲淹・欧陽脩・王安石・司馬光・蘇軾らの蘊蓄豊かな言葉は、人間関係の機微、処世のあり方についてのアドバイスとして、現代にも十分通用するものを持っている。

栗原浩英（くりはら　ひろひで）

アジア・アフリカ言語文化研究所教授　ベトナム現代史

①小谷汪之『マルクスとアジア――アジア的生産様式論争批判』青木書店、一九七九年

② Immanuel Wallerstein, *The Capitalist World-Economy*, Cambridge: Cambridge University Press, 1979.

③ロマン・ロラン「過去の国への音楽の旅　ヘンデル」（『ロマン・ロラン全集』22）蛯原徳夫／高田博厚／波多野茂弥訳、みすず書房、一九八一年

これら三冊の本は私が学部学生・大学院生時代に初めて読んでから、今日に至るまで何度も読み返している、いわば私にとっての古典である。①からは「理論」に仕立てあげられたものが一人歩きすることの危険性と、史料を冷徹に分析して結論を導き出すことの重要性、つまり歴史研究の基本を教わった。

②とは冷戦時代に出会い、その壮大な着想と観点に驚嘆した。特に「世界経済に社会主義システムは存在しない」という一節に衝撃を受けた。その後ベトナムに留学して社会主義の実態に触れるにつけ、著者の指摘が正鵠を得たものであることを知った。

③はややオタク的かもしれないが、グローバルな活躍をした人間は昔からいたことを教えてくれる。ヘンデルの作品の優美なメロディーや力強さはどこから来るのか。そのオペラやオラトリオにはなぜ母語（ドイツ語）によるものがほとんどないのか。まさにそこに巨匠のグローバルな生き方が投影されているのである。

小松久男（こまつ　ひさお）

総合国際学研究院特任教授　中央アジア近現代史

西徳二郎『中亜細亜紀事』陸軍文庫、一八八六年（復刻：青史社、一九八七年）

В.В. Бартольд, История культурной жизни Туркестана, Ленинград: Академия Наук СССР, 1927.（**ヴ・ヴ・バルトリド**

古典への扉　古典的作品を読むうち、至高の一行に出会うことがある。気がつけばそれが生きる糧になっていることも。欄外ではお気に入りの一行を選び、「古典への扉」として紹介します。（編集部）

歴史感覚は過去を追体験する感覚ではなく、音楽を聴くときのように世界を理解する感覚である。――ホイジンガ『文化史の課題』より。ルカーチ『歴史学の将来』の中でこの一行に出会った。いま問われているのは歴史学の未来ではなく、歴史を学ぶことの未来だろう。（R）

『トルキスタン文化史』（1・2）小松久男監訳、平凡社、二〇一一年）

Zeki Velidi Togan, *Hâtıralar: Türkistan ve Diğer Müslüman Doğu Türklerinin Millî Varlık ve Kültür Mücadeleleri*, İstanbul: Hikmet Gazetecilik, 1969.

西徳二郎（一八四七－一九一二）の**『中亜細亜紀事』**は、サンクトペテルブルクに勤務した若い外交官が、一八八〇年のロシア領トルキスタン旅行の見聞をもとにまとめた日本で最初の中央アジア地域研究の成果。ひきしまった漢文調の文章がいまや新鮮に映る。イタリア語訳もある。

バルトリド（一八六九－一九二三）の**『トルキスタン文化史』**は、ドイツ系ロシア人の碩学による中央アジア史の古典。いま読んでも学ぶところが多い。

トガン（一八九〇－一九七〇）の**『回想録』**は、ロシア帝国内のトルコ系ムスリム民族の一つ、バシキール人の少年が東洋学を志し、一九一七年のロシア革命で体制が変わると、バシキール民族運動の指導者となってレーニンやスターリンらと交渉、ソヴィエト政権と決裂した後はトルコに亡命してイスタンブル大学教授としてトルコ民族史を講じるに至った波乱の人生を描いて秀逸。その教養の深さも一読に値する。バルトリドは、彼の師であった。

佐々木あや乃（ささき　あやの）
総合国際学研究院准教授　ペルシア古典文学

フェルドウスィー『王書――古代ペルシャの神話・伝説』岡田恵美子訳、岩波文庫、一九九九年

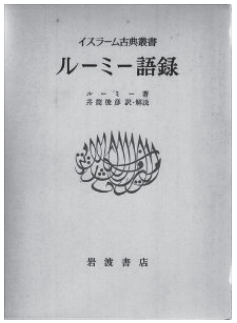
一一世紀初めに編纂された、ペルシア歴代の王や勇者たちが繰り広げる一大スペクタクルの抄訳です。イラン人のアイデンティティを知るための必読書といえるでしょう。運命に翻弄される英雄たちの物語は、読者の魂を激しく揺さぶります。本学図書館に原書全巻や仏語訳も所蔵されていますので、ぜひ実際に手にしてみてください。

Saʿdī Shīrāzī, Abū Muḥammad Musharrif al-Dīn ibn Muṣliḥ ibn ʿAbd Allāh: *Golestān-e Saʿdī: az rū-ye qadīmtarīn noskhe-hā-ye mowjūd dar donyā*, dar taḥt-e naẓar-e Moḥammad ʿAlī Forūghī, Tehrān, Ketābkhāne va chāpkhāne-ye Berokhīm, 1316 [1937 or 1938].

シーラーズ出身の詩人サアディーは恋愛詩の巨匠である一方、中世イスラーム世界の倫理・道徳観を反映させた二作品『果樹園（ブースターン）』『薔薇園（ゴレスターン）』の作者としても知られています。後者『薔薇園』の詩篇では、人を思いやり、他人の苦痛に寄り添うことの大切さがうたわれており、その詩句は国連本部にも掲げられ、世界中の人々に親しまれています。岩波文庫をはじめ、和訳も数篇出版されています。

ルーミー『ルーミー語録』（イスラーム古典叢書）井筒俊彦訳、岩波書店、一九七八年

原語タイトル ***Fīhi mā fīhi***（フィーヒ・マー・フィーヒ）は、アラビア語で「その中には、その中にあるところのものがある」という意味。井筒氏の名訳により、一三世紀イスラーム神秘主義詩人の最高峰たるルーミーの雑談集（?）に親しめるようになって久しいのですが、ルーミー人気が国内で高まらないことに日本人として焦燥感を憶えています。本書を手にした外大生が、ルーミーの紡ぎだす比喩、隠喩、寓話の大海へと漕ぎ出し、波間を漂いながら人間の真なる生き方・在り方を考えることによって、自らの目標を見つけることを心より願っています。



佐野洋（さの　ひろし）
総合国際学研究院教授　計算言語学・教育工学

外国語の知識を学び、その技能を獲得することは不断の努力が必要で、憶え込むことの重要さは誰もが承知しています。でも古来、修習思惟することの大切さも説かれています。思惟すること、すなわち理性を使って母語を自覚した上で俯瞰する視点で世界に対峙できる能力こそ、グローバルに活躍する要諦なのでしょう。

ビレーム・マテジウス『マテジウスの英語入門――対照言語学の方法』千野栄一／山本富啓訳、三省堂、一九八六年

有名な言語学者の訳出による名高いチェコの言語学者が書表した英語入門書です。原著は「英語なんかこわくない」。まず訳者の解説を読んで、ことばを対照する心得を意識して本文にあたってほしい。

南不二男『現代日本語の構造』大修館書店、一九九八年
三上章『象は鼻が長い――日本文法入門』くろしお出版、一九六〇年

母語（日本語）の言語システムに気づき、深く意識できるでしょう。前者では、日本語にも確固とした構造が在るこ

迷わされながら迷わし、騙されながら騙していた。――アウグスティヌス『告白』より。センター試験・倫理で出題されたりして、お説教のように思われがちだが、実は聖人と呼ばれる前にいかに遊んでいたかを「告白」している。やんちゃな若者の更生の記録。（S）

言語には差異しかない。――フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』より。言語を関係性から捉え、所記と能記、共時態と通時態、ラングとパロルなど、言語学を考えるうえでの幾多の概念を生み出した巨大な入門書。ソシュールの言語観は、静態的か動態的か？（H）

とが分かります。後者は、数学者による書で、日本語の構造背景にあるメカニズムを教えてくれます。無自覚に使っている日本語のその表現を使う訳が、そうだったのかと合点が行くでしょう。

H・ブラッドリ『英語発達小史』寺澤芳雄訳、岩波文庫、一九八二年

社会で使われることばは、間違いなく発達や変化の推移など過去を背負っています。本書から単語の由来や表現獲得の経緯など、孤立語化に突き進むことばの変遷を再認識すれば、語の配置が持つ特別な意味など、英語知識の再構成と意識化がいっそう進むでしょう。いずれも外国語の闇を照らす高照度の灯明です。外国語を使っている自分の影が見えます。さらには、グローバル世界を照らすことができるに違いありません。

中野敏男（なかの　としお）

総合国際学研究院教授　社会学

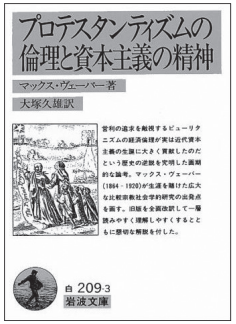
マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波文庫、一九八九年

カール・マルクス『資本論　第一巻』（上・下）今村仁司／三島憲一／鈴木直訳、筑摩書房、二〇〇五年

「古典classic」というのは、もちろん古いということではなく、つねに変わらぬ確かな準拠点であるということだろう。そこに立ち返れば、いつもしっかりした思考の論理が示され、繰り返し新しい着想が得られ、ここで切実な現在を考える上でも確かな導きの手をさしのべてくれる、そんな書物こそ「古典」と言うにふさわしいとすれば、わたしにとっての「古典」は間違いなくこの二冊である。

そう言っても、社会科学の古典といえば必ず出てくる二冊のことであるから、それらは恐ろしく難解であるに違いないと尻込みする人がいるかもしれない。しかし、この古典が本当にすごいのは、読者の求めやレベルに応じてそれぞれそれなりにおもしろく理解させてくれるところにある。

もちろん、始めはゆっくり読むことが大切だ。迷子にならないくらいのスピードで丁寧に読む。そうすると、なにかが思考の網にかかってきて、なるほどと分かることが少しずつ出てくるし、そこに発見がある。そうなると、今度は書物の力が「分かる」を導いてくれるから、



兎に角君に教えるがね。一切の理論は灰いろで、緑なのは黄金なす生活の木だ。――ゲーテ『ファウスト』より。書物で見つけた灰色の理論など、生活の無類の幸福と比べれば大したものではない。とはいえ書物から学ぶことは多く、時には読書に励むことも必要である。（K）

安心してそれに付いていけばいい。そんな至福の読書体験ができる「ゆっくりした時間」。それは学生のときの特権だから、どこかで立ち止まってそうした時間を一度は作ってみたらどうだろう。人生が変わりますよ。

南潤珍（ナム ユンジン）

総合国際学研究院准教授　韓国語学

作者・年代未詳**『春香伝　全集』**キム・ジニョン編、博而精（ソウル）、一九九七年

作者・年代未詳**『沈清伝　全集』**キム・ヒョンジュ／キム・ジニョン編、博而精（ソウル）、一九九七年

作者・年代未詳**『興夫伝　全集』**キム・ジニョン編、博而精（ソウル）、一九九七年

ここで紹介する三篇の古典小説は、一八世紀以後に筆写されたと推定され、作者も知られていない。韓国の伝統的な公演芸術「パンソリ」の演目に基づいたものであるためである。これらの作品は、韓国文学における「パンソリ系小説」というジャンル中で最も有名な作品である。ストーリーの基となったパンソリに複数の流派があったこともあり、小説として定着されてからはなおさら多くの変種が出て、現在、数十種の異本が伝わっている。朝鮮半島の人々にどれほど愛されてきたのかを物語る事実であろう。

『春香伝』は、若い男女の恋が様々な社会的抑圧を超えて結ばれる物語であり、『沈清伝』は、親孝行の理念とシンデレラ・ストーリーが合体したファンタジーであり、『興夫伝』は、善人と悪人の対立構図を通じて経済構造の変化に伴う価値観の葛藤を反映した作品である。それぞれの作品は物語性だけでなく、風刺とユーモアに富んだ表現で近代朝鮮の民衆の意識を表していると評価される。

これらの作品の人物像は時代とともに再解釈され、現代文学をはじめ、ドラマや映画にもよく登場する。韓国人の心を理解するのに欠かせない貴重なテクストである。ここで古典として紹介する所以である。

水野善文（みずの　よしふみ）

総合国際学研究院教授　インド文学・インド思想

『バガヴァッド・ギーター』上村勝彦訳、岩波文庫、一九九二年

『マヌ法典』渡瀬信之訳注、平凡社東洋文庫、二〇一三年

「インド人も吃驚！」って、今の学生諸君は知らないだろ

私は誰か？――アンドレ・ブルトン『ナジャ』より。1928年に発表された本作は、自分への問いかけから始まる。妖精のようなナジャと暮らす日々――実際に出会った人物、出来事、言葉を克明に記録するという小説のスタイルには「真の人生」が見え隠れする。（Y）

うね。テレビに流れたのが一九六四年というから、ちょうど五〇年前、インド人も驚くほど美味しいという某カレー・ルーのコマーシャル。カレーそっちのけで、それほどインドは驚愕一杯の国なんだ、と純真な幼心に刻み込まれたのは、私ばかりではなかっただろう。

そこで紹介するのが、インド古典から。ご存じ長大な叙事詩『マハー・バーラタ』に組み込まれている**『バガヴァッド・ギーター』**。柵や結果を恐れず、自分に課せられた義務（スヴァダルマ）をとにかく為せ、と教える。「今でしょ！」のご本家と言ってもいいだろう。

もう一点は、二世紀ごろには成立していた生活規範書**『マヌ法典』**。家族のなかでそれぞれの成員がどう振舞うべきか、罪をどう清めるか、といったことが記されている。前者は、現代のインド映画における家族の肖像分析に、後者はガンジス川をシンボライズした女神の清浄性分析に、それぞれ今年当ゼミの卒論で参考に供された。

古典ながら、いずれもインド人の行動パターンを理解する一助として必読の書である。

八木久美子（やぎ　くみこ）

総合国際学研究院教授　宗教学（近代イスラム）

①遠藤周作『沈黙』新潮文庫、一九八一年

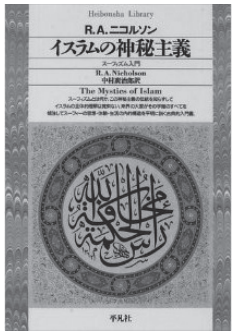
②ナギーブ・マフフーズ『カイロ三部作』塙治夫訳、国書刊行会、二〇一一－二〇一二年

③R・A・ニコルソン『イスラムの神秘主義――スーフィズム入門』中村廣治郎訳、平凡社ライブラリー、一九九六年

①は遠藤周作が、日本のキリスト者としてキリスト教という宗教に真っ向から取り組んだ作品。異文化そのものと思われるキリスト教が日本人にとって真に意味あるものであり得ることをみごとに示している。

②はノーベル文学賞を受賞したエジプト人作家による三部からなる長編小説である。両大戦間のカイロの下町に生きた家族三代を主人公にした作品で、二〇世紀前半に新しい国造りを目指して闘った人々の経験がいきいきと描き出されている。作者の自伝的な部分も多く、当時の知識人が新しい西洋の思想に魅惑されつつ、イスラムの信仰との矛盾に苦悩する姿を見ることもできる。

③はタイトルのとおり、イギリスの東洋学者によるイスラムの神秘主義についての入門書だ。ウラマーが代表するいわゆる「公的」イスラムではなく、精神世界の内奥に入り込むようなイスラムの側面を見たいとすれば、神秘主義は格好の切り口になる。



文化の違いを超えて、人が何を考えているか、何と格闘しているのか、それを追いかけるのが好きという人にはこの三冊はおすすめである。

山本真司（やまもと　しんじ）

総合国際学研究院准教授　イタリア語学

①Carlo Tagliavini, *Le origini delle lingue neolatine*, Pàtron, Bologna, 5a ed., 1969

②Adolf Adam, *Corso di liturgia*, Editrice Queriniana, Brescia, 2° ed. 1990（*Grundriss Liturgie*, Verlag Herder, Freiburg im Breisgau, 1985）

古典という言葉を私なりに解釈した結果、教科書・学習書として定評があり、学術的な扱いにも耐えられるような、入門書を紹介することにした。①はロマンス語言語学の教科書、②はキリスト教に関する本である。また、もともと、①はイタリア語、②はドイツ語で書かれたものだが、翻訳が出ているので様々な言語で読むことが可能だと聞く。これも「古典」としての価値を物語る一面であろう（どちらも私はイタリア語で読んだが）。

①は、私が大学院生だったころ、ロマンス語学の授業では、外語大でも（イタリア語学担当教官の秋山余思先生の授業）また留学先（イタリア、パドヴァ大学）でも、この本が教科書あるいは参考文献として使われていた。個々のロマンス語の概要だけではなく、ロマンス語言語学の歴史について、その主な理論やそれを生み出した研究者たちの名前に触れながら、理解を深めることができるようになっている本である。年代的な限界は当然あるとして、歴史言語学・方言学・文献学を統合した古典的な言語研究（イタリア語では、これを、linguistica と区別して glottologia と呼ぶ）を概観するのには大変良い本である（概観といってもそれなりのページ数がある本なので簡単には読み終えられないが）。

②は、聖職者養成のコースでも使われている教材だが、平易な文体で書かれていて、一般の人にも勧められると思う。儀礼文化論の立場から、キリスト教の理解を深めるのに役立つとともに、カトリック教会の典礼研究の膨大な成果を

そうか、そうか、つまりきみはそんなやつなんだな。――ヘルマン・ヘッセ『少年の日の思い出』より。許されることのない過ちを犯してしまった主人公の息苦しさを、蝶をモチーフに生々しく描き出した短編。国語の教科書で読んだ人も多いのでは。（M）

これらの役人の大半は……受けた教育のせいで、都市部でしか気持ちよく暮らせなかった。――ウィルフレッド・セシジャー『湿原のアラブ人』より。警官が赴任地の自然を前に、ラジオなしでは退屈で発狂しそうだと著者に訴える。著者、英国人なんですけどね。（A）

垣間見させてくれる本でもあり、キリスト教が、いわゆる大航海時代以前からも、ヨーロッパ文化圏にとどまらない世界的な広がりを持っていたことをも再認識させてくれる。その内容は、特に、カトリックやギリシャ正教の伝統を知る人にはなじみ深い点が多いと思うが、（日本のキリスト教界では多数派である）プロテスタントの立場からは、いくらか新鮮に見えるかもしれない。

ラーム・ドヴィヴェーディ（DWIVEDI, Ram Prakash）
世界言語社会教育センター特任准教授　メディア・スタディーズ

मुंशी प्रेमचंद : रंगभूमि, नेशनल बुक ट्रस्ट, इंडिया, २००५ (Munshi Premchand, *Rangbhumi: The Arena of Life*, Translated by Christopher R. King, Oxford University Press, USA, 2010)

『ラングブーミ』（一九二五年初版）は高名なヒンディー語作家の一人、ムンシー・プレームチャンド（一八八〇－一九三六）の著したヒンディー語の長篇小説である。この小説は、伝統と変容する近代的価値観との問題、とりわけ封建主義と産業化との間に生じる衝突について触れている。封建社会において、土地は財産であるのみならず生活の一部であり、祖先の記憶として、どれだけの代価を払ってでも売却されずに守られる。

物語は、イギリス支配下のインドにおける封建領主と土地に飢えた産業資本家から、自らのなけなしの土地を守るために闘う英雄スールダースを巡って展開する。彼の闘う姿勢は一般に言えば道徳主義、詳細に述べればガーンディー主義だ。物語は真に迫る広範なものであり、一九二〇年代から一九三〇年代の独立以前のインドに確かに存在した貧しい農民、彼らを搾取するインド人地主に対するイギリス人支配者の黙認という当時の時代性を映し出しているといえる。

作中では、ふたつの筋が同時並行的に進展する。主となる筋は、資本主義と産業の力に対する道徳的な古い価値観の敗北だ。もう一方はヴィナエ（ヒンドゥー教徒の男）とソフィア（キリスト教徒の女）の間で繰り広げられる、異文化間のロマンスであり、ふたつの筋は時に交差しながら物語を織りなす。

作者プレームチャンドがこのような構成にした意図は、小説を読みやすく、かつ面白くすることである。また、プレームチャンドは技巧にたけた名匠でもある。彼の性格描写の手法は独特であり、哲学と行動、伝統と近代、支配者と被支配者をそれぞれ混成させる。

沈黙するためには、ことばが必要である。――石原吉郎『望郷と海』より。この一行が書き記された背後にある、過酷な時間と繊細で強靭な意識を心底想像せよ。そして、この詩人（本学出身）が、いかにしてことばとともに生きてきたかを知れ。（R）

文庫・新書で読むおすすめの古典40

「歴史意識」にふれる四つの古典

岩崎稔

知っているだろうか。来年の東京外大の前期日程入試の個別学力試験から、地歴の選択科目に「日本史」が加わる。これは何も、政治家を初めとして、世の中にはびこり始めている「日本、日本」と自分のことばかりを言いたてたがる風潮とはまったく関係がない。世界史にしても、日本史にしても、要するに大切なのは、いま目前に起こっていることを、過去との対話のなかで相対化し、出来事をわたしたちの行為の結果からなる地層とみる感覚なのだと考えたからこその改革だった。方向性としては、むしろ軽薄な自文化賛美とは反対に、自分の外と内に存在する他者の声によく耳を傾ける学生に来てほしいと望んだ結果だ。そこで、「歴史意識」という観点から四点、文庫・新書になっている古典を挙げよう。

古代からは**ヘロドトス**の**『歴史』**（松平千秋訳、全三巻、岩波文庫）ではどうだろう。過去について語り、書き留めるということが、どのような動機から始まっているのかを考える機縁になる。**ヘーゲル**の**『歴史哲学講義』**（長谷川宏訳、全二巻、岩波文庫）は、そのヨーロッパ中心主義に憤然とするかもしれないが、それでも、歴史とはバラバラの出来事ではなく、むしろそれらが壮大なプロットをなす過去現在未来の実に大きな物語なのだということを、最大のスケールで体験できる。それから、ヘーゲルの弟子筋ということになるわけだが、**マルクス**の**『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』**（植村邦彦訳、平凡社ライブラリー）は、歴史のアイロニーを把みとり、まさに目前で起こっている出来事の歴史性を読解する、という手際がどういう力を持つものであるのかを実例として示してくれる。もうひとつは、二〇世紀から、**E・H・カー**の**『歴史とは何か』**（岩波新書）を選ぼう。高校生にだってよく知られている一冊だが、歴史というものは、何か放っておいてもそこにゴロリと存在している何かを書き写して保存する行為なんだと少しでも思っているなら、分かりやすい語り口でありながら、それはとんでもない間違いだとカーが論じているくだりに、ぜひ正面から向き合ってほしいと思う。

どんな歴史も、それを語るという行為と語るひとがなくては成立しない、不確かで壊れやすい営みなのだ。だが、その感受性が希薄になっていくときに、人間の文化は荒っぽく、粗雑で、好戦的になってしまう。ちょうどいまの時代のように。

いわさき・みのる　本学国際社会学部長・出版会編集長

本学出版会編集委員と編集スタッフ、そして附属図書館職員のみなさんから、文庫・新書で読めるおすすめの古典をご紹介いただきました。本をこよなく愛する選者による古典案内としてご活用ください。冒頭はわが編集長の岩崎稔先生のエッセイ、その後の古典案内はジャンル別に掲載しています。（編集部）

建築の仕事をしている間にも快適に住める何か別の家を準備しなければならない。――デカルト『方法序説』より。「我思う、故に我あり」の言葉の背景には、研究をしながら雑務に追われ、ものごとをシンプルに済ませたい、という現実的な思いがあるように感じる。（S）

【歴史・地域】

西郷信綱『古事記の世界』岩波新書、一九六七年

特定の観念あるいはいわゆる科学的客観的合理的な態度で古事記にのぞむのではなく、そこに住みこみ古代人と対話しつつ手さぐりで読みすすむことによってこそ、自分のものとして古事記を真に理解できるという。（早津恵美子）

ミシェル・レリス『幻のアフリカ』岡谷公二／田中淳一／高橋達明訳、平凡社ライブラリー、二〇一〇年

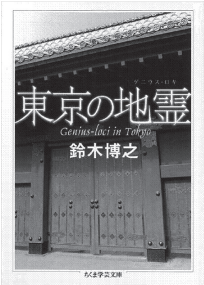
自分がいま立ちつくすこの土地とは、いったいどこなのか、そして自分とは、いったい何者なのか。フランスの詩人ミシェル・レリスが若き日に訪れたアフリカ滞在中の日誌。古典とは、しばしば奇書である。（真島一郎）

エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ『自発的隷従論』西谷修監修、山上浩嗣訳、ちくま学芸文庫、二〇一三年

巨大な暴力と闘うときに、暴力は必要ない。権力者に隷従しないと各自が心に誓いさえすれば、権力は自然に崩壊する。一六世紀フランスの「チョー古典」が、時代をこえ、今また世界に、日本によみがえる。（真島一郎）

鈴木博之『東京の地霊』ちくま学芸文庫、二〇〇九年

中心からの距離で極座標的に〈空間〉を構成する西欧にたいし、日本人はそこでなくてはならない〈場所〉のつらなりとして空間をとらえる。〈場所〉には歴史が堆積し、土地の精神（ゲニウス・ロキ）となって漂う。歴史建造物の保存・活用を先導した著者が遺した日本建築史論の古典。（千葉敏之）



孫文『三民主義』（上・下）安藤彦太郎訳、岩波文庫、二〇一一年

語る人、孫文。近代のすべての時刻と地理を渉りながら、世界／地域について共通のエッセンスを引き出そうとする声は、何より聴きやすく面白い。自国と共に帝国日本へのコトバにも富み、現代世界にもこの「古典」が必要だとしたら、孫文は嘆くだろう。語る人の声を聴くのは君。（橋本雄一）

辻邦生『安土往還記』新潮文庫、一九七二年

織田信長の時代をポルトガルの宣教師たちの視点から描いた歴史小説。高校までに学んできた「日本史」とは何か、「織田信長」とは誰なのか。私たちが習った歴史はテレビで見る世界のように狭くて色がないことを知る一冊。（古橋英枝）

安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』平凡社ライブラリー、一九九九年

幕末から明治初めにかけて起こった民衆運動を可能にした背景を、史料から探り確認していく。私達の身近にある道徳は、人々を体制に倣わせる装置である反面、その体制に抗う一手となり得るという指摘に思わず唸り、また、学問に対する真摯な姿勢を学べる必読書。（石川偉子）

シュリーマン『古代への情熱――シュリーマン自伝』関楠生訳、新潮文庫、一九七七年

ギリシャ神話の伝説の都市「トロイア」は実在する――。少年時代に抱いた夢を、遺跡発掘によって証明したシュリーマンは言語を短期間でマスターする方法を発見、じつに十数カ国語を習得していたという。考古学者にして語学の達人、シュリーマンの波乱万丈記。（大内宏信）

竹内好『日本とアジア』ちくま学芸文庫、一九九三年

「大東亜戦争は、植民地侵略戦争であると同時に、対帝国主義の戦争でもあった。この二つの側面は、事実上一本化されていたが、論理上は区別されなければならない」（「近代の超克」一九五九年）。日本の近代化、中国観・アジア観、ナショナリズムを問い直した評論集。（大内宏信）

矢内原忠雄『「帝国主義下の台湾」精読』若林正丈編、岩波現代文庫、二〇〇一年

帝国主義理論と現地調査を含む豊富なデータを基にした台湾研究の古典『帝国主義下の台湾』（矢内原忠雄著、一九二九年初版）に、編者が詳細な注を施し、時代情況について考究した。涂照彦『日本帝国主義下の台湾』（東京大学出版会、一九七五年）と併せて読みたい。（大内宏信）

フレイザー『金枝篇』永橋卓介訳、岩波文庫、一九五一年

イタリアのネミ湖湖畔に存在した「森の王」をテーマに、世界各地の伝承・習俗を比較参照しながら仮説を構築していく。読み物としても面白いが、論の展開の仕方など論文執筆のお手本としても参考になる図書。（布野真秀）

E・H・カー『歴史とは何か』清水幾太郎訳、岩波新書、一九六二年

「歴史とは現在と過去の対話である」という文句で有名な一冊。客観性を重視する近代歴史学に対し、歴史認識には主観というプリズムが挟まることを指摘している。歴史について思考・研究する際の指針に。（布野真秀）

渡辺一夫『フランス・ルネサンスの人々』岩波文庫、一九九二年

一六世紀フランスの激動期を生きた、地位も職業も異なる一二人の生涯をたどりながら、ルネサンスの実態と本質を描く。そこには、人間とは何か、自由とは何か、歴史とは何か、その始原の姿が見える。大江健三郎解

未開墾地帯のバナナ園との境界線は、完全に直線ではない。――A・ロブ＝グリエ『嫉妬』より。印象的なバナナ園の描写で始まるアンチ・ロマンの金字塔。バルザック（物語過去）→カミュ（複合過去）→ロブ＝グリエ（直接法現在）と、動詞変化をたどるのも楽しい。（H）

常に酔っていなければならない。それこそは一切、それこそ唯一の問題である。――ボードレール『パリの憂鬱』より。忙しない時代に生きていようとも、吹く風や陽の光に身をゆだね、あるいは、音楽や酒に身をゆだね、「酔い」を味わうことを忘れてはいけない。（K）

説の版をぜひ。（竹中龍太）

【哲学・思想】

荒井献（編）**『新約聖書外典』**講談社文芸文庫、一九九七年

聖書の世界は、『聖書』（正典）のみにとどまらない。イエスの幼少期や少女マリアの生活、聖パウロが天国を垣間見た話など、信徒の想像力を刺激したのはむしろ外典の世界であった。聖書の「古典」から漏れ落ちた聖書外典の古典的訳業。（千葉敏之）

大杉栄『自叙伝・日本脱出記』飛鳥井雅道校訂、岩波文庫、一九七一年

「一犯一語」。監獄にブチ込まれるたびに、獄中、猛勉強で外国語をひとつマスターした大正期最大のアナキスト大杉栄は、外大生の大先輩だ（仏語科卒）。自由とはいうが、あなたはここまで自由に生きられるか。（真島一郎）

『荘子』（全四冊）金谷治訳、岩波文庫、一九七一年

宇宙とは〝道（タオ）〟と数字の一二三から成ると老子は定義したが、生きがたさとは、その宇宙に立っていた最初の一本の樹をニンゲンが伐ったことに始まる。このことを現在にまで証明し続けるのが、抵抗しつつ天翔る荘子です。（橋本雄一）

マルクス・アウレーリウス『自省録』神谷美恵子訳、改版、岩波文庫、二〇〇七年

ストア哲学に傾倒し、その実践に努めたローマ皇帝（在位一六一―一八〇）の残した著作。短い文章からなり、読みやすい。「ストイック」という言葉の本来の意味を理解し、糧としたい。（上田誠治）

井筒俊彦『イスラーム思想史』中公文庫、二〇〇五年

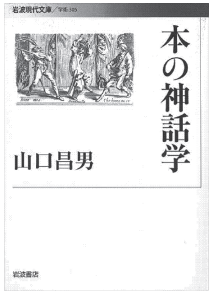
一三世紀までのイスラーム神学、神秘主義、哲学各領域における「最高の思想家」を取り上げた通史。イスラームを宗教からだけでなく、ギリシア・西洋中世哲学へ言及しながら解説する視点の広さは研究にあたり多くの指摘を与えてくれる。（村上遥）

三木成夫『胎児の世界――人類の生命記憶』中公新書、一九八三年

歴史は書物の中にあるわけではなく、意識できる記憶にあるものでもなく、みずからの無意識の身体の中に宿っている。文字通り、人間が人間の形を成すまでの時間の中に、はるかなる歴史と記憶を探る。（竹中龍太）

山口昌男『本の神話学』岩波現代文庫、二〇一四年

古典とはつねに、わたしたちの読みにかかっている。だからこそ、古典は新たに生まれ続けるのではないだろうか。知の愉楽をも超えて、柔らかい強度をもつ思考を示し、まさに古典の海を泳ぎ生きた著者による奇跡の一書。（竹中龍太）



【言語】

エドワード・サピア『言語――ことばの研究序説』安藤貞雄訳、岩波文庫、一九九八年（初版一九二一年）

「序説」とはいえ簡単ではない言語学の入門書。具体的な言語事実の厳密な分析の中にも主情が感じられ、ブルームフィールドやソシュールとはひと味違っているのは、心理学に親しみ詩や音楽を愛したサピアだからか。（早津恵美子）

新村出『語源をさぐる』教育出版、一九七六年（旺文社文庫一九八一年、講談社文芸文庫一九九五年）

『広辞苑』の編者による随筆。「くすり」等身近な語の語源やそれにまつわる古今東西の話が、かなり専門的な内容もゆったり語られる。同じく言語学の碩学による亀井孝『お馬ひんひん』（朝日選書）もご一緒にどうぞ。（早津恵美子）

千野栄一『外国語上達法』岩波新書、一九八六年

語学の勉強を始める前にぜひ一読を。私はほとんどザセツしかかってから読みました。皆さんには、〇〇語が「できる」ということの自分なりの定義、すなわち目的をはっきりさせてから勉強をはじめてほしいと思います。（大和加寿子）

鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書、一九七三年

「異」文化、「他」言語――理解しているつもりでも問われると言葉に迷う、そんな時に開く一冊。日本語を他文化言語と比較することで客観的に捉え直し、言葉が文化と社会によって規制されることを浮かび上がらせる。その知見は出版から四〇年経った今も色褪せない。（石川偉子）

【文学】

壺井栄『二十四の瞳』新潮文庫、一九五七年

一年生一二人とおなご先生との岬の分教場での明るい日々は先生の怪我で半年程で終わる。その後、岬をもじわじわと覆う暗い影に翻弄された先生と子どもたちは、昭和二一年春の日に辛さと懐かしさのなかで一八年ぶりに寄り添う。（早津恵美子）

北條民雄『いのちの初夜』角川文庫、一九五五年

「生命です。生命そのもの、いのちそのものなんです」。昭和一二年、都内ハンセン病者収容施設にて、二四歳の若さで他界した作家・北條民雄の代表作を収録。いのちの重みに、深

勝つは負ける日の初め、負けるはやがて勝つ日の初め。――吉川英治『新・平家物語』より。平家物語の「盛者必衰」を暗示する一行は、現代を生きる私達の胸にも訴えかける。「国民文学作家」と呼ばれた吉川の作品は、青空文庫で読むことができるようになった。（Y）

ああ、ミス――マリラ、空想ってすごくたのしいのに！――モンゴメリ『赤毛のアン』より。児童文学の古典的名作。夢見がちでおしゃべりで感情豊かなアン。彼女が過ごす毎日は、想像の羽でどこまでも飛んで行けたこども時代を鮮やかに思い出させてくれる。（M）

く、重く向きあうための古典。
（真島一郎）

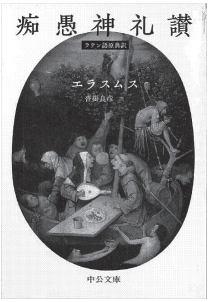
筧久美子『李白』角川ソフィア文庫、二〇〇四年

李白の〝白〟は「白日」の〝白〟、「告白」の〝白〟。そして「空白」の〝白〟。科挙を受けなかった漢字の異者として、漢字による心の共通語を創った。ニンゲンとコトバの両方の謎を知りたければ、世界には彼の詩がある。
（橋本雄一）

石川淳『安吾のいる風景／敗荷落日』講談社文芸文庫、一九九一年

石川淳を「古典」と呼ぶのは、本人にも後輩の安吾と太宰にも怒られよう。だが良き古典とは抗うエネルギイとスピイド。フランク・ザッパも認めるだろうその全方位プログレ日本語と、彼が外国語を学んだ場所とを確認せよ。
（橋本雄一）

エラスムス『痴愚神礼讃――ラテン語原典訳』沓掛良彦訳、中公文庫、二〇一四年



人びとを駆り立て、世界を動かすのは愚かな狂気、という礼讃の裏の本心は？　訳者は本学名誉教授。その「あとがき」からは、古典翻訳に必要なことは何か、がうかがい知れる。
（上田誠治）

レーモン・ルーセル『ロクス・ソルス』岡谷公二訳、平凡社ライブラリー、二〇〇四年

天才科学者の発明品が並ぶロクス・ソルス荘。音や意味が似ている語を組み合わせていくというルーセル独自の創作方法を基に、言葉と想像力だけで肥大していく挿話たち。この奇想のコラージュを無益ととるか否か、読者の姿勢を問われる一冊。
（石川偉子）

木山捷平『大陸の細道』講談社文芸文庫、二〇一一年

敗色濃い戦争末期、酷寒の満洲へ渡った木川正介――迫りくる理不尽に対して友情・人情と酒を糧に諧謔で挑む。著者の実体験を元に一五年を費やした渾身の一作は、ささやかに強かに生き抜く「反骨」の心を教えてくれる。
（石川偉子）

フェルドウスィー『王書――古代ペルシャの神話・伝説』岡田恵美子訳、岩波文庫、一九九九年

イランの詩人フェルドウスィーが西歴一〇一〇年に完成させ、ガズナ朝のスルタン・マフムードに献じたペルシア文学史上最大の民族叙事詩。イラン建国からアラブ民族の侵入までの五十人の王の治世が雄大な英雄譚、恋物語、悲喜劇として描かれている。
（村上遥）

フローベール『ブヴァールとペキュシェ』鈴木健郎訳、岩波文庫、一九五四年

二人の筆耕ブヴァールとペキュシェは持ち前の好奇心から、あらゆる学問領域を踏査するが、すべて失敗と裏切りの連続で、決して満足は得られない。「下手の考え休むに似たりだ、写そう」。というわけで、物語の最後に二人は元の筆耕に戻る。フローベール未完の遺作。
（大内宏信）

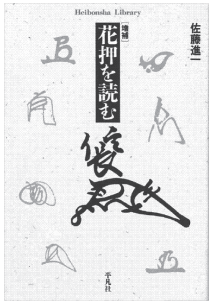
小川未明『小川未明童話集』新潮文庫、一九五一年

岩波文庫版には載っていないのですが、「飴チョコの天使」がおすすめです。「飴チョコ」は森永のチョコキャラメルのことやで、と母に言われ、それ以来ずっと探していますが、めったに出会えません。
（大和加寿子）

【芸術】

佐藤進一『増補　花押を読む』平凡社ライブラリー、二〇〇〇年

活字で読むと味気ない公文書の原本には、実はその時代の美意識が凝縮されている。本書は、日本中近世の公文書に書／描かれた組文字型署名「花押」の美と英知の世界を、その道の専門家が洒脱に論じた花押研究の古典。西洋の花押「モノグラム」の美意識に通じる。
（千葉敏之）



グスタフ・ルネ・ホッケ『迷宮としての世界――マニエリスム美術』（上・下）種村季弘／矢川澄子訳、岩波文庫、二〇一〇年

蛇状曲線的（セルペンティーク）で痙攣的（クラランク）、妄想、眩暈、倒錯、狂気の迷宮。古典からの逸脱衝動と視覚芸術の実験の時代「マニエリスム」の魅力を語り尽くした、マニエリスム研究の古典。種村季弘と矢川澄子（澁澤龍彦の元妻）の訳で一九六六年に出版され、学生運動渦中の大学生を魅了した。
（千葉敏之）

木下是雄『理科系の作文技術』中公新書、一九八一年

技術と芸術は限りなく近い。「必要なことは洩れなく記述し、必要でないことは一つも書かない」（六頁）感性にも似るこの技術の習得は、学習・研究・仕事のあらゆる場面で役立つ。
（古橋英枝）

［選書・執筆者］

早津恵美子　総合国際学研究院教授・言語学／日本語学
真島一郎　アジア・アフリカ言語文化研究所教授・人類学
千葉敏之　総合国際学研究院教授・ヨーロッパ中世史
橋本雄一　総合国際学研究院准教授・中国文学／植民地文化事情
上田誠治　学術情報課サービス係
大和加寿子　学術情報課目録係
古橋英枝　学術情報課受入係
村上遥　学術情報課目録係
布野真秀　学術情報課サービス係
大内宏信　出版会編集部
石川偉子　出版会編集部
竹中龍太　出版会編集部

この世にとどまろうとすれば、この世は夢のごとくに逃げる、――ゲーテ『西東詩集』より。ハーフェズの詩に感銘を受けて編まれた詩集。背景にはドイツ東洋学の伝統があった。蠟燭の炎に恋焦がれ、身を滅ぼす蛾はイスラム神秘主義における神との合一の象徴でもある。（A）

経験というものは、己れの為にする事ではない。相手と何ものかを分つ事である。――小林秀雄「匹夫不可奪志」より。著者39歳のときに書かれた一行。人生の経験から得られる智慧などつまらないし退屈だ、と小林はいう。経験なるものの本質を鋭く射抜く至言。（R）

古くさい学問のすすめ——古典研究とアメリカの大学

加藤雄二

昨年までぼくが研究員をしていたハーバード大学やMITなど、名門大学がひしめくボストン、ケンブリッジの街では、バス停などで分厚い古典文学を読む学生を目にすることが珍しくありません。チャールズ河に近いオールストンという学生街のバス停で、トルストイの『戦争と平和』やジョージ・エリオット『ミドルマーチ』など分厚い小説を読んでいる学生たちに出会いました。

「アメリカ」という言葉には「新しい」イメージがつきものですが、ぼくたちにとって新しい感じがするアメリカ合衆国という国の大学や教育システムは、古典をとても大切にする傾向があります。アメリカ最古の大学であるハーバード大学は、古典を教授する方針を現在も変えていません。英文科の授業カリキュラムは、古英語から始まって、イギリス文学の古典、ロマン派の詩、一八世紀・一九世紀の小説など、伝統的なトピックで構成されています。他専攻の科目として映像論、ジャーナリズムなどの授業も履修できますが、古典が中心となっていることにかわりはありません。本学が交換留学提携を行っているSan Diego State University, SUNY Albany, SUNY Stony Brookなどの諸大学でも、その分野にかかわる古典的テクストを扱わない授業は稀で、意外なほど普通のカリキュラムが組まれています。左のページに、ハーバード英文科の学部カリキュラムの一部【表1参照】、それから、経済理論と古典から現代までの文学を絡めた授業の概要【表2参照】も、例として引用しておきます。

先端的研究で知られるUC Berkeleyの教授と、一九世紀アメリカ文学研究に関わって交流があります。コーネル大学で学んだ彼は、新しい方法論をつかってハーマン・メルヴィルなど一九世紀アメリカの古典作家を教えているのです。その時代の支配的な文化的思潮はロマンティシズムでしたから、学生たちは最新の理論とならんで、カントやヘーゲル、エドマンド・バーク、イギリスその他ヨーロッパの基本的な古典的文献も学びます。『ジェンダー・トラブル』のジュディス・バトラーも教えている大学ですから、フェミニズムやメディア論、カルチュラル・スタディなど新しい研究分野の研究も盛んに行われています。しかし一方で、学生諸君はかなりの分量の古典的テクストを読むことになりますし、多くの学生は、それこそが大学で学ぶ意義だと感じているはずです。ぼくの知り合いのサミュエル・オター教授やバトラーの仕事のように、新しい視点で古典を見直す作業によって大学や教育システムの活力が保たれているのです。

学生、教員の区別なく、ぼくたちが現在の世界と向き合うことは非常に重要です。英語を学ぶことやアメリカを含めた英語圏に留学することは、その目的に大いにかなっているはずです。でも、シェイクスピアあたりから始まる現代英語は決して新しい言語ではありませんし、教養ある英語話者はたいてい複数の英語以外の言語や古典言語を学んでおり、ギリシャ・ラテン語や古い英語、ドイツ語、フランス語などに由来する語源をある程度知ったうえで言葉を使っています。

新しいものとして喧伝されがちな「グローバル化」というのは、世界の文化の歴史を共有することを意味してもいます。ぼくはアメリカ各地、世界各国の古典アメリカ文学研究者たちと、国際学会などで一緒に仕事をしてきました。アメリカ一九世紀の古典作家、詩人であるHerman Melville や Edgar A. Poe, Nathaniel Hawthorne, Emily Dickinson などを議論しようとするとき、豊かな経験を積んでこられたイタリアや中国、ポーランド、イギリスなどの研究者の懐の深さに励まされます。ポーランドでの国際メルヴィル学会では、日本ではほとんど名前を聞かなくなったセーレン・キルケゴールに言及する地元の若手研究者たちに感銘を受けたりもしました。そうした際には、古典を異なった地域の人々と共有することがグローバル化にとって枢要なのだと実感します。

進歩主義のお手本でもあるアメリカは、とくに一九八〇年代以降、歴史への意識を深めています。ぼくたちも合衆国の新しくて古い古典指向から学ぶべきときがきたのかもしれません。

かとう・ゆうじ　総合国際学研究院准教授
アメリカ文学・文化

表1　Harvard大学英文科、学部共通カリキュラム授業題目の一部

5. Lectures with Sections
English 103d. Old English: Beowulf and Seamus Heaney
English 124d. Shakespearean Tragedy
English 131. John Milton: An Introduction to his Life and to Paradise Lost
English 141. The 18th-Century English Novel
English 144a. American Plays and Musicals, 1940-1960
English 153. The Comic Enlightenment
English 160b. British and Irish Writers 1700-2012
English 162m. Modernism as Theatre
English 170a. High and Low in Postwar America
English 178x. The American Novel: Dreiser to the Present
English 190x. Philosophy and Literature: The Problem of Consent

表2　同・授業概要

English 67. Migrations: Capitalist Hero Anti Hero: Versions of the American Dream
Instructor: John Stauffer
This courses couples classic American literature with contemporaneous economic theories and/or textbook to explore the extraordinary transformations in how Americans have understood and responded to “the market,” “competition,” “success/failure,” and function of a business/corporation. Authors include Ben Franklin, Adam Smith; Melville; Marx; Wharton; Du Bois; Veblen; Fitzgerald; Schumpeter; Dos Passos; Galbraith; Samuelson; Ayn Rand; Bellows; Arthur Miller; Updike; Mankiw; others.

松浦寿夫先生にきく

日常の記号

聞き手 倉畑雄太（外国語学部ヒンディー語専攻四年）

――まず、先生は古典を読むということについてどのようにお考えでしょうか？

必ずしも古典を読まなければいけない、というわけではないのではないかと思います。読書ということを考えると、それが古典であるかということ以上に、その人にとって、いま最も必要なものを読むことが大切だと思います。

古典であるかに関わらず、必要を感じた時に必要なものを読むことの方が大事で、本当の意味で読書や思考が始まるためには、何か必要性の方が先にあるんだと思います。こちらの方に態勢ができていない限り、どんな読書も抽象的な読書にならざるを得ないですし、自分の思考が困難な局面を迎えたとか、そういう場面で初めて本来的な意味での読書の有効性が始まるのではないのでしょうか。

――本を読む以前に、そのきっかけとなる問題意識を持つことができない場合はどうしたらいいですか？

考えてみると、生きてゆくひとつひとつの場面の中では、小さな出来事が山のように転がっていて、ふと振り返ると反応すべき出来事は多いはずです。実は、問題は常に降りかかっている。その中で強く自分に印付けてくるものもあれば、そうでないものもある。そういう小さな出来事を考える時に、やはり書物は一つの方法になるのではないかと思います。

ただ、書物は基本的に、他人が書いたものですから、全てがわかるというのは非常に困難です。そのわからなさが、芋づる式に別の本につながっていったりする。そうした中で、古典的書物に出会うことも当然あると思います。

必要性があって思考が始まる、というモティーフを最もうまく書いている本のひとつはドゥルーズの『プルーストとシーニュ』（宇波彰訳、法政大学出版局）という本です。私たちが生きているといろんな記号に遭遇し、記号を解読しないとそこで生きていけないケースがありますよね。そこで初めて記号を思考対象に設定することになります。

――そうすると、古いものよりも新しいもののほうから思考を始める、ということもあるのでしょうか。

そういうわけではありません。モネという画家がいますが、モネというと印象派の代表的な画家と認識されています。所謂印象派と呼ばれているような絵画は、一八七四年の印象派の第一回の展覧会の時期に形成されました。私の考えでは、モネの最も優れた作品は一九二〇年代くらいに作られているので、それはほとんど「抽象絵画」に近づいています。いま考えると、モネは一八七〇年代の印象派の画家というよりも、一九二〇年代頃の最も優れた抽象的な画家である、という見方も成立するわけです。

この頃の作品の例として分かりやすいものですと、太鼓橋を描いたものがあります。一八八〇年代に描いたものは一目でそれと分かるものですが、晩年になってくるとほとんどどこに橋があるのか分からなくなります。『睡蓮』の連作や『印象・日の出』では水平線が描かれなかったり曖昧になったりする。抽象絵画はもっと後のものですが、そこから遡ってみれば、実は構造的特徴はこの頃から既にあったといえます。

――最初の話に戻りますと、日常を観察する〈私〉の目が重要になってきますよね。

例えば、ニーチェのアフォリズムにある、とても有名な言葉ですけれども、私たちはよく形という語を用います。どうして私たちが形というかというと、世界は常に変化し、本来的に固定したある形に帰着することはあり得ないのに、視覚器官が粗雑だから形といってしまうんですね。同じものが同じものに見えないということは日常的にあることです。多磨駅から外語大まで歩いてくるだけでも随分そうしたことを経験します。

印象派の重要な経験も、同じものが同じでないということに気が付いたことだと思います。世界の姿を光の関数のもとに描こうとすると世界は同じ状態にはない。そう考えると、モネとニーチェはほぼ同時代人ですが、世界が絶えざる変貌状態にあるということの発見という意味では、同じ時代を共有していると思います。変貌を肯定する時に、〈私〉も絶えず変貌しているわけですから、見る対象も変化するように、〈私〉も変化します。

まつうら・ひさお　総合国際学研究院教授　近代芸術の歴史／理論

藤井守男先生にきく

普遍的な世界をめざす古典

聞き手 加藤あい（外国語学部朝鮮語専攻四年）

――どのような古典を選んでいただけましたか？

一冊目はゲーテの『ファウスト』（相良守峯訳、岩波書店）ですね。大学に入った頃、理系に進んだ兄から、「これ、面白いよ」って勧められました。

ゲーテがドイツ語で書いたものですが、言語や地域を超えた普遍性をもっていると思うんですね。というのも、外語大では地域に張り付くような勉強の仕方をさせています。そうすると、目の前が狭くなっちゃう。だけどこの本は、そういう枠を取っ払った、普遍的な世界を見せてくれるという意味で、大変優れていると思うんです。読み物としても面白いし、何といっても詩が美しい。例えば、「人生は、彩られた映像としてだけ摑めるのだ」とかね。絶対的な実在以外は陽炎のようなものでしかないと。この一節は、私の専門としている分野の考え方と、似ているなあ、面白いなあと。四〇を過ぎてから気付いたことですけどね。

――先生はイスラム神秘主義文学がご専門でしたね。

私の専門の分野に関連させていうと、神秘家が自分の世界を表現する途は、アレゴリーでしかないわけですよ。喩えであるとか、象徴で語るしかなくなってしまう。「私」が経験している「あの世界」をこの世界において語る言葉はないんですね。それに似て、中世や伝説上の人物、物語、錬金術を題材にしながら、何かもっと違う、もっと大きな、普遍的な世界をアレゴリカルに表現するものが、『ファウスト』には重なって入っています。

それからもうひとつ、『ファウスト』について印象に残っていることがあります。だいたい四〇年、いろいろな本を読んできましたが、その中で『ファウスト』の一節が、エッ！　というような、思いがけないところで引用されるんですね。歴史家や思想家に、どれほどのインスピレーションを与えてきたというのか……。これほどの本はおそらく他にないと思いますね。

――二冊目には何を選んでいただいたのでしょうか。

プラトンの『国家』（藤沢令夫訳、岩波書店）です。プラトンは、純粋なる知性だけの世界があると断言しているんです。感覚では捉えられない、思惟だけの世界、知性界があって、さらにその中で善のイデアが最も重要であるというのです。そして知性はその世界に上昇していくことによって、救済されると。『国家』がすごいのは、それを軸に、政治制度にまで議論を広げているところです。哲学の議論はここまで、ここからは政治学の議論です、とはいわない。つまりこの本は、根源的な認識論と、政治制度とが結びついてなければいけないのではないかということを教えてくれる本なんです。人間が物を考えるあり方を、国家制度・政治制度にまでずうっと敷衍する、その思考と構想力というのでしょうか、それを個人的には面白いと思いました。

三冊目は、この本（『ルーミー語録』井筒俊彦訳、岩波書店）。私の専門にも関わる本です。

――『ルーミー語録』って、どんな本ですか？

この本は、中世に活躍した最大の神秘主義詩人ルーミーが、弟子たちに語った言葉を書き取ったものだといわれています。だから、ルーミーが何を考え、何を喋っていたのかがかなり素朴な形で記されています。ルーミーはほかに、『シャムセ・タブリーズ抒情詩集』や、ペルシア語のコーランともよばれる『精神的マスナヴィー』という大作をのこしています。

『ルーミー語録』を選んだ理由は、訳者の井筒俊彦が書いた解説が、いま現在あるルーミーについて日本語で書かれたもののうちではこれがいちばん良いのではないかなと思うからなんです。井筒が解説を書いたということに、意味がある。この中で、井筒はかなりルーミーの本質に迫った解説をしているんですよ。

学生時代に感じたことと、専門が出来始めたときに思うこととは全然違うものだと思うんです。そこでまた違う古典の活用の仕方があると思います。例えばプラトンの著作を読んでおくということは、勉強していく中でいろいろなところに新たな着想を与えてくれるような気がします。その中で、ものを認識する、考える、理解する、それがそのまま世界構造の説明につながるような、全てが一体化したものの考え方を学ぶのがよいと思います。

ふじい・もりお　総合国際学研究院教授　ペルシア文学・神秘主義文学

栗田博之先生にきく

文化人類学の「はじまり」を知る

聞き手　石山真澄（外国語学部中国語専攻四年）

——まずはご専門の文化人類学についてお聞きしたいのですが。

一九世紀初頭から徐々に姿を現してきた学問です。当時ヨーロッパが全世界を植民地化しようとする中で、色々な植民地の「モノ」の蒐集から文化人類学は始まりました。そして、次第に「モノ」を作り出す人間に焦点があてられるようになる。現地に滞在する行政官、宣教師、探検家などが現地の人々の生活を報告した文献資料に基づいて異国の文化を研究する。これが文化人類学の出発点です。

当時は「自分たちよりも文化程度の低い、遅れた人々の研究」と位置づけられていて、これがちょうど同時期に流行っていた進化論と結びつきました。自分たちは人類進化のトップに位置し、それよりもずっと遅れた人が世界にはいるという形で、文化を序列化していったんですね。これが二〇世紀初頭まで続きましたが、そこで革命が起こる。

それまで行政官らの報告書を用いて「こんな野蛮な人々は進化の初期の段階にある」というような研究ばかりやっていたんですが、本当にそういった資料に依拠して研究を進めていいのかを疑わせるような研究が発表されたんです。

それが、現代のフィールドワークという調査法の基礎を築いたイギリスの社会人類学者ラドクリフ＝ブラウンとB・K・マリノフスキーの研究です。この二人が自ら現地調査に赴いたところ、既存の資料で描かれた文化とは全く違うものが見えてきた。「未開」というフィルターなしに現地の人々と一緒に生活してみると、既存の文献資料が偏見や誤解に満ち満ちたものだということがわかってきたんです。これ以降自ら現地調査する人類学者が次第に増えていき、それまでの「未開の地に遅れた人々がいる」という見方から「人々は彼らなりに合理性をもって暮らしている」という見方に変わっていきます。こういった考え方を文化相対主義といいます。

文化の序列化を排して考えるためには、現地に赴き、人々とともに生活し、偏見を捨てて、現地文化の意味や合理性を発見していかなければならない。この原則は現代の文化人類学までずっとつながっています。文化人類学の世界で古典というと、一九世紀の進化主義の研究も含まれることになりますが、やはり今読まなければならないのは、ラドクリフ＝ブラウンとマリノフスキーでしょうね。

——彼らの本にはどのようなものがありますか？

例えばB・K・マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』（増田義郎訳、講談社学術文庫）。メラネシアのトロブリアンド諸島とその周辺で行われている「クラ交換」を扱った民族誌です。現地の人々の生活の中に合理性を発見し、一九世紀の進化論の考え方を否定する重要な契機となった作品ですし、フィールドワークの成果としても非常に重要な意味を持つので、文化人類学を志す者の必読書ですね。

C・レヴィ＝ストロース『構造人類学』（荒川幾男ほか訳、みすず書房）という本も重要です。構造主義というのは簡単に言うと「個々の人間の主体性とは別の次元に構造というものがあり、人間はそれに拘束されている」という考え方です。レヴィ＝ストロースはこの考え方を人間社会の分析に適用しようとした。文化人類学に構造主義の考え方を取り入れると、それまで見えていたのとは全く異なった構図が見えてくる。私が学部学生だった頃には、この本が一番流行っていましたね。

——では、学生に、学問の入り口として古典を紹介するとしたらそういったものを選ばれるのでしょうか？

最初に学問の面白さを知ることが大切なので、あまりに学問的な話ばかりが先行するのは良くないかもしれません。

古典と呼べるかどうかわかりませんが、『クロコダイル・ダンディ』（P・フェイマン監督、一九八六年）という映画があります。これは「未開の地で自然と生きる人々の伝統的知識の素晴らしさ」というようなロマンチックな夢想を裏切ってくれるシーンが色々と挟み込まれているコメディ映画です。何らかの理想があって、それをひっくり返して初めて文化人類学の世界に入ることができるんですね。

世界のどこかへ旅行に行って、現地の人々の生活を素晴らしいものと感じる。そこで「では本当に素晴らしいものかどうか検証してみよう」という気になれば、文化人類学の入り口に立ったといえます。ロマンチックなストーリーを組み立てたうえで、その夢想をうち砕く決意さえあれば、文化人類学の世界への道が開けてくるはずです。

くりた・ひろゆき　総合国際学研究院教授　文化人類学